【55】

氏　名（本　籍）	志賀一朗（茨城県）
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第108号
学位授与年月日	昭和57年11月30日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	湛甘泉の研究
主　査	筑波大学教授　文学博士　高橋　進
副　査	筑波大学教授　文学博士　三枝充悳
副　査	筑波大学教授　文学博士　湯浅泰雄
副　査	筑波大学教授　岡本敬二
副　査	筑波大学教授　文学博士　内山知也

論文の要旨

本論文は，中国明代の思想家王陽明と同時代者で且つ王陽明と密接な学問上の交流をもった湛甘泉について，その学説・思想を全体的に究明するとともに，湛甘泉と王陽明との学問的な交流の実態を考察し，進んで湛甘泉の学説・思想が王陽明のそれに如何に影響を与えたかを明らかにしようとしたものである。さらに，そのための基礎的研究として『湛甘泉先生文集』（全32巻）を逐一全部解読し，これに訓点を施している。論文の構成は，研究篇と資料篇に分けられ，研究篇は7章から成り，269頁に及び，資料篇は『湛甘泉先生文集』（全32巻）の全文に訓点を施して掲載し，543頁に及ぶ。

研究篇の第一章は「湛甘泉の経歴」について述べ，第二章「『甘泉文集』の解説」は，同文集全32巻の構成を明らかにし，各巻の概要を逐一解説し，最後に編者と同文集成立の事情に触れている。第三章「湛甘泉の学的伝承」は，伝統教学の宋明における主たる継承者として，周濂渓，程明道，程伊川，張横渠，邵康節，呉康斎，陳白沙等を挙げ，湛甘泉の学問とこれら先人の学説・思想との関連を明らかにするとともに，特に直接の師たる陳白沙との関係を詳述するが，結論的には湛甘泉は程明道の思想にこよなく私淑し，その学的影響が最も大であったとしている。以上の三章は，いわば序説的役割を果たしているものと解せられる。

第四章「湛甘泉の学説」は，本研究の要訣たる第一の課題について詳述したものである。湛甘泉

の標傍した学説は「随処体認天理」で，先師陳白沙の説に基づく。陳白沙はこれを解説せず自得のみを求めていたが，湛甘泉は思索工夫の結果，初めは「体認天理」としていたものを後に「随処」を附加し，一箇の学的体系を構成したものであることを述べ，まず「体認天理」について「体認」及び「天理」の意義を明らかにし，次いで「天理」と人間，天理の内容，「体認天理」の方法及びそれの身心における具現の状態等について論じている。次に「随処」が附加されたのは，湛甘泉32歳の時であるとし，その根拠を陳白沙が湛甘泉に与えた書簡の内容，当時の湛甘泉の学問状況等を詳細に分析した結果から導き出している。湛甘泉が「随処」を加えたのは，「体認天理」だけでは時・処・位の論理及び実践の方法が欠けるとし，「随処」を附加することによって，「体認天理」はさらに具体化されるとともに，この語は，彼の論理から推して「処に随ひ」と訓むべきであると論結している。そして，この語の附加によって，湛甘泉の思想は一層深められ，注目すべき「知行並進」論が提唱されるに至ること，及びこれは後に「知行合一」説に発展するが，湛甘泉のこの時期における独創的思想であり，「随処体認天理」に必要不可欠の提唱であることを論証している。

著者は湛甘泉の思想においては，「天理」にかかわる所論として「敬」「中正」「良知」「知行」等が重視されているとし，また「体認天理」の方法として「勿忘勿助」「格物」が重要であるとし，これら相互の論理的関連性について論述している。特に「勿忘勿助」については，『甘泉文集』全体からその意義を抽出し分析して，この語と「自然」「中正」「機」「全放下」との関連を論じた後，要するに「勿忘勿助」の体認は右の語にかかる修養によって達せられるとし，さらにこれらの語は表現こそ異なれ，内容において「随処体認天理」の実践方法として同一なるを論結している。次に「心」は湛甘泉の学説・思想成立の根柢をなすもので，「心」は「精にして神，虚霊知覚，虚霊応変」であり，また明鏡の如きもの，その本体は自然，無好悪，天理，良知，至虚，無動静であるが，さらに「心は物を体して遺さず，遠近なく，内外なし。」といい，また「心なる者は天地万物を体して遺さざるものなり。」ということによって，「心事合一」「物我一体」の境位を実現することを論ずるとともに，湛甘泉がこの「心」の発見・了悟によって，彼の「随処体認天理」の裏付けとなった「心性図説」「四勿総箴」が作成され，結果的には王陽明の格物説と根本的に相違するもととなったことを論定している。著者は次に，湛甘泉の「知行」論に注目し，『甘泉文集』全体から知行論が三段階に分けて発展・展開されているとし，その第一段階は「知行交進」「知行並造」「知行兼尽」であり，第二段階は「知行並進」，第三段階は「知行合一」となったことを明らかにするとともに，「知行合一」は決して王陽明の創見に成るものでなく，すでに湛甘泉の思索し提唱するところであったことを論証している。

以上，湛甘泉の学説・思想を詳論して，著者はその結論を図式に集約し，彼の「随処体認天理」は要するに「勿忘勿助」「良知」「知行」のいずれの修養によっても達成可能であることを明らかにしている。

第五章「湛甘泉の教育」は，『甘泉文集』巻六「大科訓記」を中心資料として，彼の門弟教育に対する厳しい方針・内容を紹介し，第六章は湛甘泉の人物と後裔について述べ，第七章は王陽明と湛甘泉の交友の実態と王陽明の学説に対する彼の影響について述べている。両者の交友・論争関係に

ついては，九種類の資料を逐一精察分析し表(1)にまとめ，これを基にして湛甘泉から王陽明に宛てた書簡を，執筆の年代考証を施して整理し表(2)にまとめ，さらに王陽明から湛甘泉宛の書簡を年代順に整理して表(3)とし，これと表(2)との関連を精密に考察することにより，両者の交友・論争関係を明瞭にするとともに，「格物」の論争が如何になされたかを究明している。結論として著者は，両者の交流は格物論争に尽きるとし，湛甘泉は格を「至る」と訓み，王陽明は「正す」と訓むことによって，前者は「格物は修身にあり」としたのに対して，後者は「格物は誠意にあり」としたため，両者の交流はいよいよ深まっていったが，その主張は遂に平行線を辿って一致をみなかったと論結している。

審　査　の　要　旨

従来，王陽明の研究は数多くなされてきたが，彼の思想ないし思想形成に重要な関連・影響のあった湛甘泉の専論的研究は，内外の学界において未だ殆んどその例をみない。然るところ，著者は王陽明の研究から出発し，その過程において湛甘泉の学説・思想の重要なることに着目し，本論文の如き専論の湛甘泉研究を一書にまとめて公刊し世に問うたことは，内外学界に貢献するところ極めて大であるといわねばならない。総じて，資料の取扱いに妥当性があり，論証は著実精密，導出した結論もほぼ正鵠を射ており，見るべきものがある。

特にその思想解釈において，湛甘泉の「随処体認天理」の説が提唱された時期を精密に論定したこと，「随処」の実践的意義の解明を通じて，彼の思想が一層発展し，「知行並進」「知行合一」論が王陽明のそれに先駆して形成されたこと，「敬」が「随処体認天理」にかかる最高の徳目であること，「心」を彼が学説・思想の根柢におき，「心事合一」「物我一体」論を確立することによって，王陽明の格物論との根本的相違をもたらしたこと，王陽明との学問的交流の実態を年代的に整理考証し，両者の論争が格物論を中心として行われたこと，及び両者の格物論の相違を明確にしたこと等々は，本研究の特筆さるべき長所である。なお，『甘泉文集』全32巻を解読し，逐一全体にわたって訓点を施して公刊したことは，従来同文集が極めて難解であるとの定評を受けているだけに，その学界・後学に裨益するところ誠に大であるということができる。これらの研究は，短時日にして成るものでなく，著者が長い年月に渉って刻苦精励を継続した成果であると認められる。

他面において，著者による湛甘泉の学説・思想の究明及び論述は，個々の概念・思想の考察については精細になされているにもかかわらず，それがやや平板に羅列的に論述されている嫌いがあり，湛甘泉の思想を体系的ないし構造的に把握し再構成する点に一段の工夫が求められる。また，湛甘泉の95年の生涯を通じてなされた王陽明以外の講友，子弟，その他当時の文人達との人間的交流の実態，及びそれから描き出される湛甘泉の豊かな人物像，彼の学説・思想の社会的影響，明代激動期に生きた彼の対社会的・政治的活動とその思想との関連における湛甘泉思想の歴史的・社会的性格等々がこの研究によって導き出されたならば，なお一層「生きた思想」としてその精彩を放つこ

とができたであろう。ただしこれは，望蜀の感なきにしもあらずである。

以上，これを要するに本論文は多少の不備もあるが，全体として中国思想史研究に特色ある一歩を進めたものであり，学界に貢献するところが少くないものと認められる。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分の資格があるものと認める。